

第2章

覆うモノ



前章と同じ小学校のクラス。共学でも男女は別々に座る。小学校も中学年になればすでに顔を隠す子も少くない。(アルジャビンにて)

ヒジャーブ（ベール）

今度は女性のかぶりモノに目を転じよう。と言っても、これは比喩的な表現である。あなたが男性であれば、イエメンでは女性を実際にじろじろ見たりしてはいけない。

周知のとおり、イスラム世界の女性は身内の者以外には素肌を見せてはならないとされている。イエメン女性の「かぶりモノ」かぶるのは頭だけとは限らないから正確には「覆いモノ」というべきだろう。は基本的にこのイスラムの戒律を守るために用いられている。ただし同じイスラム教徒であっても、「覆いモノ」の色や形状、素材、そしてその布がどの程度身体を覆わなければならないかは、国、地域、そして個人によってかなり差がある。

イエメン、とくに北部イエメンでは女性に対するイスラム的な服装規制がかなり厳格に適用されている。そもそも山岳部イエメンの町なかでは女性を目にする機会は少ないし、仮に見かけても黒づくめ三点セット（裾長のスカート、肩から羽織って上半身を覆う半円形の布、頭からかぶって顔まで隠す布）か、後述するように身体全体を覆う風呂敷のお化けといった出で立ちなので、顔を拝むことはできないし、いったいその下に何を着ているのか、どれくらいの年齢好なのか、ほとんど情報が得られない。

これに対して旧南イエメンの首都であったアデンでは、かなりの程度女性のかぶりモノの「近代化」が進んでいた。社会主義政権下にあったため公共機関に働く女性も多く、彼女らの間では髪の毛は隠しても顔は露出するスタイルが一般的であった。しかし、一九九〇年の統一後、社会主義勢力の退潮とイスラム勢力の復活でアデンでも顔を隠すスタイルの女性が増えていたようだ。もちろん、これらの服装規制が公的にアデン女性に新たに課されたわけではない。それは社会的な「風潮」のなせるわざであり、彼女たち自身の「戦略」の上にかぶりモノを選んでいたのである。

ところで、異教徒でかつ男性である私にとって、女性の服装やかぶりモノに関する情報収集はかなり困難である。観察のサンプル数は最初から少ないし、直接女性に尋ねることもほとんどできない。そもそも、女性と話をする機会などめったにないのだ。頼りはイエメン人男性の友人と日本人女性研究者からの間接情報ということになる。それらの情報にしたところで、人により地域により「覆いモノ」の呼び方は違うし、形状、素材、用途によつて「覆い布」も多様な下位区分をもち、さまざまな呼ばれ方をしているので、以下に示す名称が唯一の呼び方というわけではない。

女性を覆うかぶりモノをわれわれは一般に「ベール」と呼んでいる。しかしベールとい

アラビア語はない。「覆つ、包む」という意味のアラビア語の動詞は「H・J・B」という三つの子音で構成されており、この名詞形「ヒジャーブ」が、イエメンでは「覆い布」の総称として用いられている。そして「ヒジャーブ」は、それが何を覆う（外界から何を隠す）のか、によつて大きく五つの用途があるように思われる。ヒジャーブが覆うのは「髪の手」「顔」「身体の線」「腕や足」そして「目」である。

髪の手を覆うモノ

ヒジャーブの第一の、そして最も重要な用途は「髪の手を覆うもの」である。そして髪の手を覆っている状態は「ムハッジャバ」と形容される。これもH・J・Bの派生形である。さて、髪の手を覆い方にはどうやら二つの方法があるらしい。

一つ目は、横長の布を用いて顔面だけを丸く残して巻きつける方法で、この布は「マクラマ」と呼ばれる。色はもちろん黒で素材は絹、あるいは木綿が多いということである。巻き終わりの布は内側にたくし込まれ、額もぴつたりと覆われる。

二つ目の方法は単に大ぶりの正方形の布を三角に折つて、スカーフのように髪の手を覆うもので、この布のことをとくに「ヒジャーブ」と呼ぶこともあるがこれは狭義の用語法である。この場合のスカーフの色は黒ではなく、白地に四角い縁どりの模様がついていた

りする。素材はテカリのある化繊が多いようだ。かぶり方は男性のマシャッドと異なり頭の部分で巻きつけてとめたりせず、額の皮下でピン留めしたり、あるいは首に巻きつけたりして髪の毛が「隙間なく」覆われるようにかぶる。マクラマと異なり額の部分がぴつたりと密着しておらず、なかにはひさしのように少し前にせり出して見せたりする人もいる。どちらかというやや「開明的」「明るい」雰囲気を感じさせるスタイルである。

とはいえ、このスカーフスタイルでも髪の毛は完全に隠されるし、耳も首筋も同時に覆うのが正しい。なぜならば、これはほぼ例外なしにすべての成人女性が「隠す」ことを期待されている部分だからである。ただしアデンでは、スカーフを少しゆるめにかぶって髪の毛がちらほらのぞいているスタイルの若い女性を見かけることがある。このような女性



「狭義の」ヒジャーブ、またの名を「女学生かぶり」。おしゃれを主張しやすい出で立ちである。(ワーディー・ザハルにて)

は「ムハツジャバではない」と形容されるが、そこには「きちんと髪の毛が隠れていない」という文字どおりの意味のほかには、「正しいイスラムの道からやや外れている」というニュアンスが感じとれるようである。

厳密には初潮前の女の子には髪の毛を「覆う」ことは期待されていないが、山岳部では幼い女の子が防空頭巾のようなとんがり帽子 グルゴ

ーシュをかぶっていることもある。ティハマでは「赤頭巾ちゃん」のような形の簡単なスカーフを前髪が少し顔を出す程度にかぶっていることが多い。またティハマでは高温多湿ということもあるが、多少の髪の毛の露出にはおうようであり、ドイツの葉の編み帽子だけで済ませている年輩の女性もしばしば目にする。



北部山岳地の少女が髪の毛を覆うために用いる頭巾 グルゴースシュ。これに銀の飾りをふんだんに縫いつけたものは結婚式のかぶりモノとなる。(スラーにて)



横長の一枚布 リスマ を顔に巻きつける。額の部分に柄を出すことができる。

顔を覆うモノ

ヒジャーブの第二の用途は「顔を覆うモノ」である。ときにエキゾチズムを強調するために日本や欧米諸国で伝えられる、イスラム女性の目だけを出した黒づくめ装束がまさにこれである。目だけを残して顔を覆った状態を「ムナツカバ」と呼ぶが、顔を覆うにも三通りほどの方法があるようだ。

一つは、黒い横長の布を頭から巻きはじめて、目だけを残して顎まで覆う方法である。

髪の毛と顔を同時に覆うこの布を リスマ と呼ぶことが多い。サナアでも家のなかではこのスタイルでいる人が多く、家族だけのときは目から下の部分を下ろして顔を露出し、来客があるときこれを鼻の上まで引つ張り上げて「ムナツカバ」になる。リスマの長辺には花柄の刺繍（黒地に黒

糸なので遠目には目立たないが、や赤いラインが入っており、これを巻くと額のところにその刺繍が出てくるようになってる。

二つ目はもう少しよそ行きの方法で、まず マクラマ で髪の毛を覆い、顔だけを出した状態にする。その上で、黒い縦長の布をあてて目から下半分の顔を隠す。この布の上辺には輪状のゴムが通っており、これでカーテンのようにぶら下げるのである。目から上半分は細くて黒い鉢巻き状の布を巻いて先ほどのゴムも一緒に隠す。こうした方法で顔を隠す布は総じて ヌカーブ と呼ばれる。



目の上下を別々の布で覆う方式のヌカーブ状態。額の部分が鉢巻き状になっているので顔全体のシルエットがすっきり見える。白い上っ張りを着ている人がいるのは、彼女らが「看護婦」だからである。ソコトラ島の病院で結核対策の講義を受けているところ。

三つ目は、内陸砂漠の遊牧民 ベドウィン などで見られるのだが、目の部分に穴のあった「仮面舞踏会」に出るようなマスク状の目覆いをかぶる方法である。しかし、ただでさえよそ者の侵入を嫌うベドウィンのことなので、私自身もこうした例を実際に見たのは五年間の滞在で一度だけである。またハドラマウトでは同様に目の部分にだけ横に切れ込みの入った縦長の布 ブルカ を額に革紐で巻きつけて顔の前に垂らす。布は幅三〇センチ、長さ四〇〜五〇センチほどで、目の部分は金系銀系で縁どりされているばかりでなく、長さ四〇〜五〇センチほどの飾りのようなにぎやかさである。両目の間、鼻の上の部分には芯が入っていて中心がずれないようになっている。

ヒジャーブの第一の目的「髪の毛を覆う」(ムハッジャバ)は、ほぼイエメン全土で共有される規範であるのに対して、第二の目的「顔を覆う」(ムナツカバ)は人により、地域によって見解が分かれる規範であり、「伝統」と「近代」がせめぎ合う領域であると言ってもいいかもしれない。

サナアをはじめ山岳部族社会の規範としては、女性の顔は他人に見られてはならないものなのだが、アデンをはじめとする南部や沿岸低地では髪の毛や襟元を完全に覆いながら

も、顔は隠さずに町を出歩く女性の姿が目につく。また統一以降南部出身者がサナアにも移り住むようになり、サナアの町の女性のヒジャーブ状況は多様化しつつあるように思われる。

身体を覆うモノ

覆い布の用途の第三は「手足を覆うこと」である。イエメンでは男も含めて肌を露出することは「はしたない」ことであり、町なかをジョギングパンツで走っている外国人はあわれみの目で見られる。もちろんこれは、紫外線が強く、乾燥していて、昼夜の気温差の大きい山岳地で皮膚を守るための生活の知恵という側面もあるのだが、いずれにせよ、手や足の肌の露出は少ないほど好ましい。男性はそれでも半袖のシャツを着ることがあるが、女性は腕の露出を避けるために長袖の服を着て、足首まであるズボン シルワール をはき、場合によっては足首にも金系銀系を縫いつけた別の布を脚絆のように巻きつけることもある。

ホジャリア地方（南部山岳地で、サナアとアデンの中間にあるタイズ周辺の地域）の農作業時の服装はこのシルワールの上からワンピースを着ることが基本で、これに リスマ スタイルの顔覆いが組合わされば、完璧な田舎娘のスタイルとなる。

これ以上に覆い布を重ねると、機能的な作業はしにくくなるのだが、水汲み、薪運びな



黒づくめ3点セットで買い物に来た女性。同じ黒い布でもそれぞれのパーツで素材が異なることがある。(ムカッラにて)

ど、自分の村から「遠征」して他人に遭遇する可能性の高い作業のときは、次に述べる「身体全体を覆う」モノが必要となる。

覆い布の第四の用途は「身体の線を覆うこと」であり、年頃になった女性が見ず知らずの男に遭遇する可能性があるような外出時にはこのための「覆いモノ」が要求される。都市の女性が家の外に出るとき、農村女性が農作業以外で外出するときがこれに該当する。「身体覆い」には主に三通りの方法があるようだ。

第一は、すでに述べた都市における上つ張りのスタンダードである黒づくめ3点セットである。後ろから見ると頭 ホンナノビナーフ、上半身 ジャナーフ、下半身 フータ をそれぞれ覆う三つの布が確認できるのでこのように呼ぶが、

実際には顔を覆う リスマ が中にあるので四点セットというべきかもしれない。このスタイル全体をさして シャリシャフ と呼ばれることが多い。口の悪い外国人はこれを「カラス」スタイルと言つ。頭からかぶる布は歩いているときは前に垂らして顔全体を覆っているが、買物などのときには物を見やすいようにこれを後ろに跳ね上げている。もちろん跳ね上げても中にリスマを巻いているので目しか現れない。われわれがこの姿を比較的じっくり観察できるのは、金スークで彼女たちが品定めに夢中になり、われわれの視線などがまっけていられないときである。

イスラムの女性の代表的な外出装束として知られている シャリシャフ だが、実はこれはイエメンでは比較的新しいファッションで、十九世紀のオスマン・トルコの第二次占領期にトルコ人の代官や行政官たちが持ち込んだものらしい。このためトルコの代官の駐在地であつたサナアで主に着用されていたが、国内交通機関が発達した一九七〇年代以降は各地の都市でも採用されはじめた。

ティハマ地方の主要都市ホデイダでも、高温多湿にもかかわらずやはり黒づくめ三点セットで外出している女性が多い。おどろいたことに、彼女たちが「海水浴」をするときにはこの三点セットのままで海に入るのである。水で濡れても体の線が露にならないし、日

焼けることはないし、クラゲに刺されたりもしないからそれなりにメリットはあるだろうが、上がったあとは塩気がまとわりついてちよつと気持ち悪いのではないだろうか、といささか同情してしまう。

身体覆いの第二は、身体全体が隠れるほどの大きな布 シターラ を、頭の上からすっぽりかぶって身体を覆うやり方で、とくに北部山岳地で用いられている。地方によってシターラの模様や素材は異なるが、サナアではくすんだ赤を基調とした絨毯のような模様の大きな布を用いる。ただしこれはほとんどインドからの輸入品である。われわれはこのスタイルの女性を「風呂敷おばさん」と呼んでいるが、これを頭からすっぽりかぶって立ち止まっているときはどちらが前だかわからない。この下にはワンピースとズボンシルワール の重ね着スタイルが基本であるようだ。もちろん顔は「リスマ」で覆っている。

同じ山岳部でもサナアより南に下った中部イエメンでは白い刺繍入りのガーゼ地の布を羽織ることもあり、これは紅海対岸のエチオピアの影響を感じさせる。また内陸部ベドウィン女性の羽織り布はかなり色使いが派手である。

バルトーの登場

「身体の線を覆う」ための三つ目の、そして新たな手段は、最近急速に普及しているバルトーである。バルトーは薄い黒地の外套で、前身頃や襟、袖口に黒い刺繍のついているものも多く（ただし黒地に黒系の刺繍なので遠目にはわからない）、前はボタンやフックで合わせるようになっている。

サナアでも以前からごく一部のインテリ女性は「顔出しスカーフ」（＝狭義のヒジャーブ）スタイルを採用していたのだが、そのときの上っ張りには「レインコート」が定番であった。もちろん袖丈、裾丈はあくまで長く、素手や素足が目に触れることはないし、色は薄い紫とかアイボリーといった無地の単色、デザインもごくシンプルでけっして余計なポケットやフレアーはついていなかったが、「カラス」や「風呂敷」に比べると格段に近代的なファッションであったのだ。この「レインコート」が庶民化し、イスラムの規制と妥協して「近代性」をやや控えめにしたのが「バルトー」であると言えそう。

バルトーはあくまで黒が基本で、素材は化繊から絹まで多様である。このバルトー姿がサナアの町なかで目立つようになったのは一九九〇年の統一以降、とくに九〇年代後半からである。そしてバルトーの刺繍は頑迷なイスラム主義者の顔色をうかがうように、少しずつ、少しずつ変化を遂げている。最近では前合わせ、裾、袖口の部分の刺繍に黒以外の

糸を用いたり、ビーズなどがちりばめられている物も出回るようになっており、あきらかに「見せる」おしゃれの要素が入り込んできている。

バルトーの流行はゆえなきことではない。同じ「体の線を覆う物」でも、バルトーはパーツの多いシャリシャフよりも簡単に羽織れるし、両手で布の端をつかんでいなければならぬシタールよりも格段に活動的である。また マクラマ とヌカーブ の組み合わせで髪の毛と顔を隠すスタイルとも両立するし、スカーフ（狭義のヒジャーブ）を用いて顔を出すスタイルとも両立する。どちらのスタイルも選ぶことができるという意味で、自由



バルトーは袖口、衿口、前身頃、裾などに年々流行モードが現れる。バルトーとヒジャーブ（学生かぶり）も両立する。（サナアにて）

度が高い。

こうして一九九〇年代末になると「ブティック」と言ってよいような小じやれた店構えのバルトー専門店も表通りに現れてきた。素材やデザインが相当に凝っている最高級品はサウジアラビアはジェッダからの輸入品である。どうやらバルトーはイエメンに限らずイスラム世界の「伝統」と「近代」のせめぎ合う場所で高いニーズをもっているようだ。ただし、ジェッダのデザイナーはフィリピン人、縫い子はインドからの出稼ぎ女性だという。インテリ女性の予備軍たる女学生は、このバルトーと同じような仕立てでネズミ色の女学生バルトー ラマーディー スタイルで学校に通うものが半分、黒づくめのシャリシャフスタイルで通うものが半分といった感じである。

イエメンに住んでいる外国人女性にも同様にバルトーが好まれている。国際機関や開発援助に携わっているNGOなどで働く彼女たちは普段はシャツにスカート、あるいはジーンズといった「西洋風」な服装で過ごしており、イエメン人の人混みのなかに出掛けるときだけ、その上からバルトーを羽織り、スカーフで髪の毛を隠す。これによって「私はイエメンの社会規範を尊重しているのよ」という意思表示ができるという意味でも便利な「覆いモノ」なのである。

ところでとくに南部で女子小学生は、社会主義時代以来のスカートとブラウスというスタイルの制服を着ている子も多い。この子たちが娘になったとき「身体の線を覆う」という規範に抵抗してブラウスにスカートや、ジーパンをはくようになるだろうか。もしそうなれば、バルトーは過渡的存在の「覆いモノ」だった、と位置づけられることになるだろう。

視線の遮断

覆い布の第五の機能は「視線を遮る」ことである。

イエメン社会において女性には、まず何よりも子供を産み育てるという意味において男性の重要な「資産」である。そして女性の価値が高いからこそ「ねらわれやすい」のであり、男性は女性を責任もって守らなければならないのだ。イエメン社会において自分の守るべき女を守れない男は腰抜けである。保護の対象となるのは何をあいても娘や妻だが、他に保護する男性がいない親族女性がいれば母、叔母、姪等も自らの責任範囲に含まれる。そして「守る」には、物理的な危害が加えられないようにすることのみではなく、他者の視線を効果的に排除することも含まれる。なぜなら自分の保護下にある女性を人目に曝すのは「恥ずべきこと」だからである。

だからなるべく女性は外出させないほうがいいし、やむを得ず外出するときにもできる

かぎり「覆いモノ」をまとわせることが望ましい。よそ者の男性がうようよいするスーク（市場）に女性を使いにするなどは、夫（未婚の女性であれば父親）の「だらしなさ」の証しである。ましてやスークで女性が物を売るなどは「男に甲斐性がない」ことの表明にほかならない。スークで物を売っているのは「身分が低いので男性に『名誉』がない」「階層に属する女性のみである。こうして近年まで、イエメンのスークにはほとんど女性はおらず、買い物はもっぱら男の仕事であった。

ところが一九九〇年代後半に入ってからサナアなどの大都市に「ショッピングセンター」「スーパーマーケット」なるものが現れはじめ、それなりに繁盛している。今のところこうした「悪所」にやって来るのは自家用車をもつ比較的裕福なイエメン家族と外国人であり、従来のスークで買い物をする「庶民」と視線が交錯することはない。そしてまたここに買い物に来るイエメン人女性は夫と連れ立っている上にシャリシャフ姿がほとんどである。

それでもこれまでスークは「女性が行かないことが望ましい場」であったのに対して、「ショッピングセンター」は家族あるいはカップルで「買い物をしに行く場」であり、これは「買い物文化」の大転換を意味する。こうした買い物文化が浸透していくと、「自分

の女を人前に曝すな」という規範が今後どのように変貌を遂げるのか、興味深い。

まなざしの力

シャリシャフ スタイルや シターラ スタイルでは、ときに顔の前面を完全に布で覆い、目まで隠してしまうことがある。ここまでは隠せば、「ヒジャーブ」は完璧なものとなり一分の隙もない。ただし、コーランのどこを探しても「目を隠せ」とは書いてないのである。なぜ目を覆うのだろうか。

まなざしに「妬み」や「うらやみ」が込められているとき、そのまなざしは厄災を及ぼす力をもつという考え方は、アラブに限らず地中海沿岸地方にも広く見受けられる。アラビア語ではこれを邪視 アイン という。赤ん坊、結婚式の新郎新婦など「うらやましい」ものはことさら邪視に弱いとされ、邪視除けが必要となる。飼っている牛の首にサンダルをぶら下げたり、お祭りのときに子供の顔を黄色く塗りたくるなどは、この邪視除けのまじないである。

美しい女性には当然邪視が向けられやすく、それだけ厄災の降りかかるリスクが高い。そして邪視を引きつけやすいのはやはり「目」である。だからこそ濃いアイシャドー コフル を塗ることや、ヒジャーブで目を覆うことで女性は邪視に対する予防措置をとるのである。したがってイエメンを含む南アラビアでは目を隠す覆い布の着用はイスラムの戒

律に規制されていると言うよりも、むしろ南アラビアの生活文化の一部として位置づけられているように思われる。それゆえにこそ、われわれは女性を見つめてはならないのだし、写真を撮ってはならないのだ。

シタラ をかぶるときにセツトになっているサナアの伝統的な顔隠し布 モゴメクは顔の前面に垂らすのだが、黒地に白と赤の同心円模様が染め抜いてある。丸い模様はおそらく「目」である。目玉模様には邪視を避ける力があると信じられているのだ。ティハマ地方では、新築の立派な建物の二階の外壁にやはり目玉模様が彫り込まれていることがある。これも邪視除け機能をもっているのではないかと思う。

目を隠すもう一つの理由は、女性が他者と視線を交わし、それによって引き起こされるかもしれない厄災を回避すること、にあるかもしれない。目だけを出しているムナツカバ状態の女性は目以外の顔の部位を会話で用いることができないので、これを補うためもあるうか目の表情がきわめて豊かである。その上イエメン女性にはくつきりとした彫りの深い二重まぶたが多いから、目で語りかけられただけで舞い上がってしまう男だっているかもしれない。「目は口ほどに物を言う」から、見知らぬ男性との視線の会話で間違いが始まらないともかぎらない。嫁入り前の娘が妊娠したり、人妻が間男をこしらえたりすれば、

彼女らを保護すべき父親や夫にそれを阻止する力がなかったことの証明となり、彼らの名誉は危機に瀕する。そうした場合、「名誉」を守るために父親が娘を自らの手で殺さなければならなかったという話はけつしてまれではない。「目は災いの元」になりかねないのだ。

黒子作用 II
移動する隔離空間

ところで、黒い覆い布をいかに嚴重に身にまとうとも、それだけで自動的に「女性に対する視線の回避」「保護すべき男性の名誉の保持」が達成されるのではない。

「見せない」という女性の行動規範と対になっているのが、女性に目を向けることは男として恥ずべき行為 アイブ であるという男性の側の規範であり、ヒジャーブをしている女性を見かけたら歌舞伎舞台の黒子のように、見ても見えないふりをしよう、という社会的ルールの共有なのである。女性たちのほうもこのルールの共有を前提にして町に出て来るのである。だから、旅行者がこのルールを無視して女性にカメラを向けたりすれば、たちまちトラブルを引き起こす。イスラム世界に足を踏み入れる以上「知らなかった」はまったく言いわけにならないのだ。また「そんなルールは無意味だから従わない」と言い、またルール破りを実践したところで得られるモノは「恥ずべき男」というレッテルと蔑み

の視線のみである。

こうして山岳部イエメンの町の表通りには、比喩的な意味で女は「存在しない」ことになるのだ。このことは家のなかでも同様である。イエメンの家屋では「男の部屋」と「女の部屋」の区別は明確である。サナアの高層建築では、応接間は最上階にあるので玄関から六階、七階まで階段を上がって行くと当然ながら途中で女のスペースを通過することになる。こんなとき、顔を出して家事をしているところを客に見られないともかぎらない。そこで、主人は客の先に立って「ヤーアッラー、ヤーアッラー」と大声で唱えながら階段を上がる。これは家のなかにいる女性に対するサイレンなのである。女性は来客を知ってあわてて扉を閉め、それが間に合わないときにはリスマを目の下まで引つ張り上げる。こうして来客は女性と遭遇しないで応接間まで上がっていく。これは、住宅地に入っていくときも同様である。女性が井戸端会議をしている可



風呂敷 シターラ で身体をすっぽり覆い、モゴメクで顔を覆った状態。
(サナア旧市街の路地にて)



サナア旧市街の住宅地は石と日干し煉瓦による高層建築群が林立している。路地はこうした塔状住宅の合間を縫うように曲がりくねっている。(タルハ・モスク付近)

能性のある路地裏に入るときは、「礼儀正しい」男は「ヤーアツラー」と注意を喚起しながらゆっくりと近づくのである。

だから家に食事に招かれたとしても、女性がかいがいしく給仕してくれることなどまず

ありえない。食事は絨毯を敷いた床の上にあらかじめ女性たちによって用意されており、男だけで車座になって食べる。追加的に何か必要なものがあれば部屋の外まで女性が運び、ドアをノックする。すると家の男がそれを部屋のなかに持ちこむというシステムであり、来客には家の女性の顔は見えない。

ことほどさように、イエメンでは男性の空間と女性の空間が厳密に分離されている。そして、家の外、表通りは基本的に男性の空間である。しかしながら「近代化」が進み、女性が職業に就いたり、さまざまな用事で外出する機会が増えてくると、女性が男性空間に紛れこむことになる。これは、男性にとっても女性にとっても困惑することである。そこで活躍するのがヒジャーブの黒子作用なのである。ヒジャーブによって覆われた小空間は、たとえどんな場所であろうとそこだけが即座に「女性の空間」と見なされる。

そして「女性の空間」はヒジャーブとともに移動する。目まで隠すという動作にはそこに隣接する「男性の世界」との間の交流を完全に遮断する、というサインが込められていると考えるべきであろう。万が一、あからさまに視線を向けたり、話しかけるなどしてこの空間を犯そうとする者があれば、必ずや周囲にいる男性が抗議してくれるだろう。このルールを信賴してはじめて、女性は自分の周りにヒジャーブによって不可侵の空間をつく

りあげ、「男性空間」のなかを遊泳することができるのだ。

ヒジャーブの遮るもの

男女同権の思想に慣れ親しんだ非イスラム世界の人々は、イスラムの女性が「近代から遮断され、無知に閉じこめられている」ことに同情し、女性を抑圧するモノとしてヒジャーブの存在を問題にする。この場合、ヒジャーブは悪であり、これを取り去ることが女性の近代的自我の目覚めの象徴であるかのように語られる。

たしかにコーランには女性に対して不利な記述が多い。曰く、「アッラーはもともと男と（女）との間には優劣をおつけになったのだし、また（生活に必要な）金は男が出すのだから、この点で男が女の上に立つべきもの」（第四章「女」第三十八節）。また、敬虔な信者に死後褒美として与えられる楽園の生活のすばらしさを強調して、「みはるかす緑の園、涌きだす泉。絹や錦をつけてみんな互いに向かい合う。それからまた、つぶらな瞳の美女たちを妻として与えよう」（第四十四章「煙」第五十二―五十四節）というのだが、女性には死後どんな褒美や夫が与えられるのかについての記述はない。

欧米では聖書の記述が男性中心主義的であるという批判が女性学の立場から出ているが、イスラム世界はまだまだそんな批判が出る状況ではない。そもそもコーランはアッラーの

言葉なのだから誤りのあろうはずがないのだ。

イエメンの女性は外の世界にアクセスする機会もなく無知蒙昧の世界に閉じこめられているのだから、ベールという因習を排除し、女性の教育・識字率の向上のために先進国が援助すべきだという主張にも、いやいや近代の金まみれの生活に汚染されていない伝統的生活にこそ人間らしい幸せがあるのだから、よけいなお節介をすべきでないという主張にもそれぞれ一理ある。また女性のベールは魅力的だから観光資源として残すべきで、お金を取って写真を撮らせれば所得向上にも寄与する、などという罰当たりな提言も無責任なよそ者なればこ



国会選挙のポスター。1997年の選挙では301議席中2議席を女性が獲得した。現在のイエメンでは「ムナッカバ」のままの選挙ポスターであっても、立候補には相応の「勇気」が必要である。（サナア第11選挙区にて）

そできる。

しかしながら、当のイエメンの女性たちはヒジャーブの存在それ自身にさほどの重圧を感じているようには思えない。ヒジャーブの存在を前提としたおしゃれをそれぞれに工夫して、楽しんでいるようにも思える。

たしかなことは、男と女は違う、そしてそれ故に互いを必要としている、という生物学的な原点をこの社会が維持しているということである。いずれにせよ、変化の方向を決めるのは彼ら自身である。ヒジャーブが遮っているのは、邪視や男たちのよこしまな視線であるよりも、先進国の人々の安易な同情であるようにも思えるのだ。